

令和 6 年 5 月 2 9 日現在

機関番号：6 2 6 0 8

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：2 0 K 2 2 0 3 4

研究課題名（和文）中近世移行期の買売春に関する研究 医書および日記にみえるSTI（性感染症）から

研究課題名（英文）A Study of Prostitution in the Middle-early modern transition period : From STIs in medical books and diaries

研究代表者

高木 まどか（Takagi, Madoka）

国文学研究資料館・研究部・特定研究員

研究者番号：5 0 8 8 2 8 3 3

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中近世移行期から明治期のSTI（性感染症）に注視し、それらについて著した医書・日記等を分析することで、STI観および買売春観の歴史的変遷の解明を目指したものである。これまで江戸から明治頃までを対象としたSTIについての研究は、その対象のほとんどが梅毒に限られてきた。しかし本研究をとおして、当時において「瘡毒」（梅毒）として語られたもののなかには梅毒以外のSTIも含まれていたであろうこと、明治に至り検梅がはじまりSTIが区別されていったのちも、そのあり方はなかなか変化をみせなかったこと等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

梅毒以外の零細なSTIはジェンダー・セクシャリティ研究の重要な対象であり、特に西洋諸国では、その疾病史や、それらが買売春に与えた影響等が明らかにされてきた。一方で日本の人文学研究においては梅毒やHIVについての研究が蓄積されてきたが、梅毒以外のSTIの存在が十分に留意されないまま議論がおこなわれてきた。しかし当時における梅毒の把握は現代からみればあやふやであり、歴史的に梅毒とそれ以外のSTIが混同されてきたことを指摘したのが、本研究の主たる意義といえる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on STIs (sexually transmitted infections) from the Middle Modern Period to the Meiji Period, and analyzes medical books and diaries written about them, aiming to elucidate the view of STIs and the reality of prostitution and its historical transition.

Until now, research on STIs from the Edo period to the early Meiji period has been mostly limited to syphilis. However, this study revealed that STIs other than syphilis were probably included in the term “syphilis” at that time, and that the distinction between syphilis and other STIs remained ambiguous among the general public even after tests for syphilis began in the Meiji period and STIs were differentiated.

研究分野：日本近世史

キーワード：買売春 性感染症

1．研究開始当初の背景

申請者はこれまで近世における遊廓に着目し、とりわけ近世前～中期の遊廓の客の実相を明らかにすることで、遊廓に通う男性たちがいかなる買売春観を抱いていたかの検討をおこなってきた*¹。しかしそこで明らかにできたのはごく限られた側面に過ぎず、買売春観の形成、展開や移行といった点は課題として残された。他方、先行研究においても、買売春観の変遷は飛び石的に解明されるに留まっているという問題がある。遊女が《聖》的な側面をもった中世に比し、近世では遊廓・遊女が《必要悪》とみなされてその位置付けが一転したことが明らかにされているものの、具体的にそれがどううつり変わってきたのかについては、十分な議論がなされてこなかった*²。

2．研究の目的

以上をふまえ、本研究では中近世移行期～明治初期頃までの買売春観の変遷の解明を大きな目的とし、その一つ的手段として、性感染症（以下 STI〔Sexually Transmitted Infections〕）に着目した。

STI に着目したのは、先行研究において、STI に対する捉え方と買売春観とが密接に関係するとの指摘をふまえたものである。とりわけ近世の《梅毒観》を論じた鈴木則子は、医書の分析から、梅毒が「恥」とみなされるようになるには時代的変遷があったこと、そうした《梅毒観》の変遷が買売春観の変化と相関関係にあったであろうことを示唆している*³。すなわち買売春が徐々に汚らしいものとしてみなされていった過程と、STI の捉え方をめぐる変化は、密接にかかわりあっていたということである。

これをふまえれば、買売春観の変遷を詳らかにするにあたって STI の検討は不可欠であろう。しかし、江戸時代の STI については、その研究対象がほとんど梅毒に限られてきたという不足がある。梅毒が伝播したという永正 9 年（1512）以前から、梅毒以外の STI は日本に存在し、当然ながら梅毒流行以後も存在した*⁴。それにもかかわらず、猛威を振るった梅毒の影に隠れ、梅毒以外の STI への関心は極めて希薄であったといえる。これまで注目されてこなかった STI に注目することは、梅毒伝播の前後を通しての買売春観や性道德観およびそれらの変化を解明するにあたって大きな手がかりとなり得ると考えた。

以上をふまえ、本研究では、梅毒はもちろん、これまで議論の俎上にのせられてこなかった梅毒以外の STI にも注目し、さらなる買売春観の解明を目指した。

3．研究の方法

中近世移行期～明治初期頃までの医書および日記・雑記類の網羅的分析を行い、とくにその罹患者について詳らかにし、買売春観の変遷を明らかにすることを試みた（なお当初は主な時代対象を 14 世紀～江戸時代までとしていたが、コロナ禍のもとで史資料調査が困難を極め、時代を明治まで延ばした）。

医書について、現存する日本最古の医書は天元 5 年（982）『医心方』であるが、『医心方』およびその後の医書は中国医書に依拠したものが多く、そこで本研究では日本独自の医書を作る傾向が兆したとされる『頓医抄』（乾元元年〔1302〕）以降の、筆者自身の考察を付した医書や、筆者独自の関心や目的のもとに撰述された医書を主に分析した。

また、日記・雑記類については、三条西実隆『実隆公記』といった中世公家の日記を端緒とし、種々の日記を扱ったが、とりわけ江戸幕府与力・佐久間長敬『佐久間氏雑稿』（東京都公文書館蔵）の検討に力を入れた。それは、佐久間長敬の著作は『江戸町奉行事蹟問答』などがよく知られている一方、買売春についても触れられた『佐久間氏雑稿』はほとんど検討されてこなかったためである。

これらの収集した史資料について、STI に関連する記述を抜き出し、年代毎・医法毎に一覧化する作業を進めた。加えて、近年の STI 研究等を参照しながら、史資料に書かれた症状が現在の STI の何に相当するか、比定できるものとできないものを区別し、更に「梅毒」と記述されているものでも、梅毒ではない可能性がある症状等について整理・検討を進めた。

4．研究成果

（１）江戸時代の医書において、梅毒以外の STI はおおむね「陰瘡」「下疳瘡」等と表記される病のなかに含まれていることが確認された（コンジローマ、性器ヘルペス、軟性下疳ほか）。ただし「陰瘡」「下疳瘡」ともにその括りが広く、さまざまな症状の病がこの枠のなかに含まれている。なかには STI ではない病（婦人病など）と思しき症状も同じ「陰瘡」等のなかに記載されており、性交渉をとおして発症する病であるかどうかの区分は、きわめて曖昧であったというこ

¹ 拙著『近世の遊廓と客』吉川弘文館、2020

² 曾根ひろみ『娼婦と近世社会』吉川弘文館、2003 / 辻浩和『中世の 遊女』（京都大学学術出版会、2017）等

³ 鈴木則子「江戸時代の医学書に見る梅毒観について」（福田真人・鈴木則子『日本梅毒史の研究』思文閣出版、2005）

⁴ 土肥慶蔵『世界梅毒史』朝香屋書店、1921

とができる。しかしその区分が曖昧且つ現代とは異なるとはいえ、「梅毒」とそれ以外の「瘡」が明確に区別されたうえで、さらに細かな症状の違いによってそれぞれ異なる対処法があると理解されていたことがみてとれる。

一方で遊廓等の買売春にかかわる史資料の検討をとおしては、遊女に関する病で記載されているのはもっぱら「瘡毒」(梅毒)であることにくわえ、「瘡」らしき症状がでた場合は梅毒を疑い、梅毒とそれ以外の STI を分けて対処する姿勢が希薄であったこともわかった。明治に至り西洋医学のもとで検梅がはじめられて以降も、そのあり方はなかなか変化をみせていない。医書を手にすることがないような遊女や遊廓関係者がいつ頃から梅毒とそれ以外の STI を認識し、区別して対処するようになっていったのかについては、今後の課題である。

(2) 一方で STI をめぐる価値観についての検討をとおしては、「公認の吉原遊廓」=「花柳病にかからない場所」であると、明治に入ってから殊更喧伝されるようになったことを明らかにした。たとえば江戸幕府与力・佐久間長敬は『佐久間氏雑稿』(明治 26 年序)のなかで、吉原遊廓は非公認の遊里と違い「花柳病」にかからない場所であると称賛しており、さらには江戸時代の頃からそうした認識が広まっていたかのように述べているのである。

しかし管見の限り江戸時代において、吉原に行くとも梅毒にかかるという考えはまみられ、佐久間の見解は過度な吉原賛美に傾いているようにみえる。こうした佐久間の主張の背景には、明治以降、諸外国における私娼の跋扈と STI の蔓延に危機感を募らせた明治政府が、検梅制度をととのえ、公娼制度を活用する方針にふみきったことと無関係でないように思われる。とりわけ明治二十年以降に盛んになった廃娼運動と存娼運動において、存娼運動派は公認遊廓が「保護衛生」を徹底した場であることを利点として強調している⁵。佐久間の見解も、そうした存娼派の主張の延長線上にあったと考えることができるのである。

以上のような分析を通し、梅毒をめぐる価値観の転換が明治初～中期にあったこと、さらには江戸時代の吉原遊廓が「衛生」観念と結びつける形で都合よく位置づけし直されたことが明らかになったのである。

上記 2 点についてはその背景等について考察が不足する部分もあるため、成果として公表すべく、報告および文章化をおこなう準備を進めている段階である。

⁵ 前掲注 1

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

講座「遊廓の実像 さまざまな遊女たち」（於朝日カルチャーセンター名古屋オンライン講座 2022/9/7）
講座「吉原の遊女たち」（於NHK学園オープンスクール国立本校 2023/1/30）
講座「お客の足取りを辿って」（於NHK学園オープンスクール国立本校 2023/8/28）
講座「江戸時代の遊廓」（於早稲田大学エクステンションセンター中野校 2023/12/4,11）

6 . 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------